



万葉風土
明日香風

犬養孝著

著者略歴

犬養 孝 (いぬかい たかし)

1907年 東京都に生る

1932年 東京大学文学部卒業

《現在》 大阪大学名誉教授、甲南女子大学教授、文学博士

《著書》 『万葉の風土』(正・続)、『万葉の旅』(全3冊)、『万葉の心』
(上下、カセット・レコード)、『大和路』、『万葉のいぶき』他

《現住所》 西宮市今津山中町 8—33

〈お願い〉

☆ご愛読ありがとうございました。小社ではみなさまの声を参考
に、より良い本を作るよう努力しておりますので、本書の
読後感をお聞かせくだされば幸いです。また内容や造本につ
いても、お気づきの点がありましたらご指摘ください。

☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記してあります。

☆万一、落丁乱丁の場合は、直接小社にお送りくだされば早速
お取替します。

☆本書巻末に記載の広告中、定価に変更がある場合もあります
ので、あらかじめご了承ください。

現代教養文庫 874 万葉風土 明日香風

© 1976

昭和 51 年 3 月 30 日 初版第 1 刷発行

著 者 犬 養 孝
発 行 者 小 森 田 一 記

発行所 株式 社 会 思 想 社

(113) 東京都文京区本郷1の25の21

電話代表 (03) 813—8 1 0 1

振 替 東 京 6—7 1 8 1 2

0192—10874—3033

双文社印刷・小林製本



山の辺の道・三輪山——崇神天皇陵より——



はまゆうの群落——新宮市孔島——



飛鳥川のいわはし



阿騎野の黎明——奈良県大字陀町——

現代教養文庫

874

萬葉
風土 明日香風

犬養 孝 著

社会思想社刊

目

次

飛鳥 (二〇)

あすか万葉の里……………一〇

甘樫の丘……………一五

飛鳥の花……………二〇

飛鳥の月……………二三

飛鳥の丘……………二六

檜隈の秋……………三〇

多武峰への道……………三四

吉野越え……………三七

象きさの小川……………四〇

阿騎野みち……………四四

♪明日香風——万葉歌碑建立をめぐる——…四八

平城 (五六)

一人だけの山の辺の道——三輪山麓をゆく——…五

平城なちの雪……………六三

佐保川の柳……………六七

田原の里……………	七〇
平城の明日香……………	七四

黒潮（七九）

紀の川……………	七九
白い月——大崎の海……………	八五
秋風の白崎……………	九〇
紀の国の小島にて……………	九三
島の紫陽花……………	九六
わが浜木綿の記……………	一〇三
浜木綿の旅……………	一〇八

東海（二四）

海女の磯笛……………	一四
薩埵峠を越える……………	一九

内海（二三）

淡路の島山……………	二三
------------	----

からにの島の記……………一三七

大多府島……………一三三

塩飽しあくの子ら……………一三八

すがれゆく島——沙弥島今昔……………一四三

筑 紫 (二四)

筑紫万葉の一齣——宗像の海山……………一四七

さつまのせと……………一五七

老岐の夏……………一六三

遠い月——万葉対馬行……………一六七

春の岬——みみらく……………一七三

山 陰 (二七)

石見の海……………一七七

石見のひと——歌碑建立……………一八三

湯抱の月……………一八八

雪の村——因幡国斤跡……………一九一

越路（二卷）

南山背・いまいずこ	一九五
々ささなみのしが々	二〇一
湖西の雪	二〇九
草の音——湖北にて——	二一四
越路の雪——帰山道——	二一八
春の花——かたかこの記——	二三四
布勢の海水	二三九
静謐の島	二三三

古典（三六）

愛のころ	二三八
古典の魅力	二四二
ゆたかな心	二四五
月読 つきよみ の光	二四九

挽歌 (三五)

取り戻す古代の心……………二五

点より面を——荒れゆく風土……………二六

〃荒廃〃への道……………二六

〃古代大和〃の喪失——古都保存法に思う……………二七

回想 (三七)

〃万葉旅行〃四十年……………二七

あとがき……………二八

明
日
香
風

飛鳥

あすか万葉の里

近年の造成地化や近代化のいわゆる「開発」の波は、飛鳥の古都の周辺にも潮のようにおしよせているが、こんにちまでのところでは、甘樫の丘陵や檜隈ひのくまの山野をあたかも防潮堤として、その東方、大字飛鳥を中心とした南北の一帯は、明日香村の人たちの努力と犠牲において、まだまだ自然にまもられているといつてよい。古都をあこがれて全国からおとずれる人も、ここまですれば、ほっとした安らぎをおぼえるだろう。

甘樫丘陵豊浦山からの展望は、東方・南方かけて、多武峰の山塊から南淵山みなぶちにいたる山地にい

だかれた飛鳥^{まがひ}真神の原の田畑のあいだに、橘寺の白壁も飛鳥宮発掘地も飛鳥の村落も飛鳥寺の所在も見おろし、白い飛鳥川の水系は雷の丘の裾をめぐって北へ、旧藤原京城を縦断し、その広大な景観のなかに、大和三山を箱庭のように配している。板蓋宮で大化改新の口火がきられてこのかた壬申の動乱（六七二年）を経て、天武・持統の飛鳥浄御原宮から、七一〇年までの藤原京にいたる時代の動脈も、またそっくり、その景観のなかにたたまれている。山のひだ、野道のわき、水流のかげに、古代の抒情も人知れずひそまっているのだ。

明日香風々はまだ颯々と千数百年をいまのことに吹いている。凍てついた土の上にすこしずつ青味の見えはじめるころから、青葉につづくころまでの、飛鳥の慌しさといったらない。飛鳥川畔のツクシやサワラビ、真神の原の菜の花やレンゲ、甘藷丘のはさまに咲く桃畑、スモモの白花、花も終るか終らないうちに柿若葉は目のさめる青さだ。こんなころ、飛鳥野を歩いていれば、
采女^{うねめ}の 袖吹きかへす 明日香風 都を遠み いたづらに吹く
(巻一―五二)

の、志貴皇子^{しきのみこ}（天智皇子）の古都回想の抒情も、花の香を送ってくる春風につけて、袖吹きかへす采女のイメージといっしょに、民家の納屋のかげにさえ、よみがえってくる。天武・持統の世を生きぬく天智皇子の生活の吐息もきこえるようだし、采女の幻想のなかには母への思慕さえかさなっていないともかぎらない。

柿若葉のいちばん美しいのは天武・持統合葬の檜隈^{ひのくまのおけち}大内陵付近である。それが緑葉を濃くするころには、真東の細川山は、椎・榎・櫟^{くぬぎ}など木々の種類の区わけのように色とりどりの緑につつまれ、飛鳥野はやっと慌しい花の歩みを終ってひといきつくのだ。香久山などむくむくした